

ジッドと〈小説〉の探求：アラン・グーレ『「贋金 つかい」を読む』

吉井, 亮雄
九州大学文学部

<https://doi.org/10.15017/9964>

出版情報：Stella. 14, pp.117-120, 1995-03-30. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：



ジッドと〈小説〉の探求

—— アラン・グーレ 『「贋金つかい」を読む』

吉井亮雄

ジッドがみずからの小説概念にしたがって「唯一の小説」と呼んだ『贋金つかい』（1925年付、発行は翌年2月）は、その数多い著作のなかでももっとも頻繁に論議の対象になってきた作品であるが、とりわけ1990年から翌年にかけては、同作品がアグレガシオンの課題にえらばれたのを機に、研究書や雑誌特集号の出版があいついだ。グーレもそのさい『「贋金つかい」使用法』と題する一書を公にしている¹⁾。作品の生成過程、構成や小説技法、主要テーマ、受容や批評、関連書誌など、メニューじたいは多分にアグレガシオンを想定した伝統的なものではあるが、事実関係についての正確で信頼のおける記述——当然ともいえるこの基準をみたさぬ類書は意外に少なくない——や、均整のとれた論旨展開によってすぐれた概説書と高く評価された。

それから3年をへてデュノ社から最近刊行された本書『「贋金つかい」を読む』²⁾は、もちろん前著の焼き直しなどではない。出来時の書評者宛て私信でグーレは本書が「前著とはかなり異なるものであり、ここでは核心に迫ろうとつとめた」と執筆の意図を漏らしている。書評者の見るところグーレにとって「核心に迫る」とは、構成上の制約のために前著では素描にとどめざるをえなかったテキストそのものの分析を、表題が示すように、今度は一貫して「読み手」の立場からおこなうことであろう。とはいえ、150頁前後の叢書という限られた紙幅のなかで簡潔に、だが十分に論述すること、しかも自身のものをはじめ多くの先行業績が存在するなかで学術的な独自性・独創性をねらい、同時に一般読者への教育的配慮を忘れないこと、このような二重の使命を果たすのは、思うにけっして容易なことではなかっただろう。しかしグーレはその困難な仕事をみごとに成し遂げているのである。

分量的にはあわせて全体の約3分の1にあたる第1部と第2部は、以後の行論を容易にし、テキストへのアプローチをより説得的なものにするための準備作業といってよい。まず第1部でグーレは、出版当時『贖金つかい』がいかにも批評界の無理解にさらされたかを代表的な書評の引用によって喚起させたうえで、しかしながらこの否定的評価は、ただ単に作品の内容や形式が同時代のモラルや小説作法に抵触したためばかりではなく、「現実と虚構というプロブレマティック」をめぐる徹底的な探求がジッド自身のそれまでの創作活動に照らしてみても際立っていたことによると強調する。

とはいえ、ジッドがいくつかの先行作品にたいしていったんは〈小説〉という呼称をあたえながらも、やがてそれを否認していったこと、また『贖金つかい』じたい完成にはじつに6年もの歳月を要したことからあきらかなように、この探求は『贖金つかい』をもって突如はじめたものでもなければ、執筆着手にあたって作家のなかにあらかじめ〈小説〉にかんする明確な定義が存在していたわけでもない。この時点ですでに長い逡巡の前史があったのであり、そして今なお多くの試行錯誤を必要としていたのである。

だからこそグーレは第2部では、『贖金つかい』の懐胎期を中心にすえつつもジッドの生と作品を概観することをためらわない（むろん伝記的事実を網羅的に記述するのはとうてい無理なことだし、このばあい必要なことでもない）。まずグーレは、それまでの流れに亀裂を生じさせ、新たな方向をあたえた事件として、マルク・アレグレ青年にたいする愛の自覚（1917年）と実子カトリーヌ・ヴァン・リセルベルグの誕生（1923年）を重視する。前者は妻マドレーヌへのプラトニックな愛と、少年たちを対象とする肉体的欲望との乖離によって規定されていた創作と行動の原理を決定的に変容させ、また後者は長らくつづいたジッド自身の青年期に実質的な終止符を打ったという意味で、きわめて妥当な指摘といえよう。つづいてグーレは、補足的情報として『贖金つかい』のいく人かの登場人物について現実の反映を喚起したのち、「自我解放から贖金のプロブレマティックへ」と移行していくジッドの創作活動全体——「トレテの時代」「レシと演劇の時代」「小説の時代」「証言の時代」そして「叡知と決算の時代」という区分も十分に納得できるものだ³⁾——を手ぎわよく辿りなおして、テキストの分析をおこなうための準備を終える。

さて第3部は、「構成と進行」という題にもうかがわれるように、『贖金つか

い』をその「二重のアスペクト」に注目して読みとこうとする試みだ。すなわち、いっぽうでは主人公ベルナルの家出にはじまり、さまざまな筋立ての進行によって成立する冒険小説、あるいはビルドゥングスロマンとして、他方では、対称的な3部形式（18-7-18の章立て）に特徴的なように、出合いや冒険などといった偶然に左右されるかに見えるその錯綜した進行が、じつは巧みなモンタージュによって緻密に構成された——そしてそこでは、全知全能の身振りをすてる〈作者〉にかわって〈悪魔〉が支配権をにぎる——観念小説、あるいはサンボリックな小説として読みとこうとする。当然のことながらそのためには、物語の時間軸にそって読みをすすめると同時に、〈小説〉をめぐる理論的な考察が展開される第2部「サアス＝フェ」を中心線として、対称性と相関性を浮かびあがらせるという二重の配慮がもとめられる。この難題を解決するためにグーレは、物語の内容を逐条的に追うという方法はとらず——そのかわり冒頭には物語全体の梗概を配している——、内容・構成のいずれにおいても進展の大きな12の章を選びだし、それらを重点的に論じようとする。これはたしかに折衷案ではあるが、冗長と錯雑をさけうという点で賢明な選択だといえよう。

作品の構成に対応してグーレの論述も3つにわかれる。最初の「世界の崩壊」では第1部の第1-4-8章が考察の対象となるが、そのうち「父の死」をあつかった第4章は、彼が「〈父〉の欠如と悪しき父たち」と名づける第3部第5-8章との対称においてとらえられる。また「人格概念の再検討」が問題となる第8章については、ベルナルが自己の同一性を見いだす第3部第13章の「天使との格闘」と密接に関連していることが示される。さらに第1章もまた第3部第17-18章と照らしあわされるからこそ、作品冒頭で発端を提示されたさまざまな物語は最後にいたって集結し、ひとつの円環を閉じるという大規模な因果関係がいっそうあきらかになる（もっとも作中作家エドゥアールがベルナルの弟カループに関心をむけることで、ただちに新たな円環のはじまりが暗示されるのだが）。このように巧みな選択によってグーレの論述は、読者がベルナルの成長の軌跡を追うことをさまたげず、また同時に作品を支配する意図的な対称性と相関性をあざやかに浮かびあがらせるのである。

最後の第4部は、作品の「二重のアスペクト」を同時的・総合的にあつかった第3部での考察に、それとはちがう角度からの読みを重ねることで、テクス

トの解釈に厚みと広がりにあたえようとする。まずグーレは〈贋金〉をめぐる主題論的なレベルで、物語をダンテ『神曲』の「地獄篇」に擬して、「贋金つかいたち」→「モラルや社会の贋金」→「意識の紆余曲折」→「芸術、文学者たち、小説」という〈地獄めぐり〉の道程を設定する。これはなかなか斬新なアイデアだ。グーレの道案内によって読者は、少年たちによる偽造貨幣の流通に端を発しつつも、問題が社会や人間心理の虚偽へと射程を広げ、ついにはそれらを語る文学そのものの贋金性におよぶことをより鮮明に認識させられるだろう⁴⁾。それだけではない。道程の終点はすでに〈小説家の小説〉あるいは〈小説の小説〉というもうひとつ別のレベルへとつうじている。そしてこの美学的なレベルの考察は、ロブ＝グリエ、サロート、デュラス、ペレックなどの現代作家についてもすぐれた業績をもつグーレにはまさにお手のものだ。ここは研究言説がもっとも集中してきたところだけに、従来水準を大きく更新するといった性格のものではないが、それでもやはり語りの構造や〈中心紋〉にかんする彼の論述は手がたく説得的である。

読みを重層化させることによって『贋金つかい』の多義的な構造を十分に描きだした本書の功績は大きい。ヌーヴェル・クリティックからはほぼ完全に黙殺されたジツド的エクリチュールの革新性を指摘することにとめてきたグーレならではの好著といえるだろう。

註

- 1) «*Les Faux-Monnayeurs*» *mode d'emploi*, Paris: SEDES, 1991, 290 pp.
- 2) *Lire* «*Les Faux-Monnayeurs*» *de Gide*, Paris: Dunod, 1994, 160 pp.
- 3) ちなみに、この区分については、すでにグーレの国家博士号論文に詳細な論述がある。Voir *Fiction et vie sociale dans l'œuvre d'André Gide*, Paris: Lettres Modernes Minard, 1986, pp. 19-71.
- 4) 〈贋金〉のもつ多義性については、ジャン＝ジョゼフ・グーの先行研究も示唆と刺激にとむ。Voir Jean-Joseph Goux, *Les monnayeurs du langage*, Paris: Éd. Galilée, coll. «Débats», 1984, pp. 11-124.